

鹿茸の価値（1）  
ろくじょう

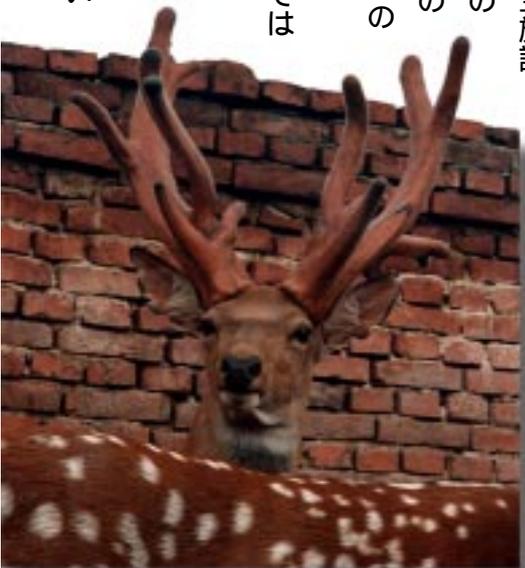
アフリカ大陸に発生したイナゴの大群が、草原の緑をたちまち食いつぶし荒野にしてしまう異変がおこる。ぞっとする生物の異変には、アリやネズミの大発生もあるが、その大群はすぐ絶滅して生物たちの人口は平衡をたもっている。この平衡はどこで調整しているのか、その一つは生物の食物連鎖がこれを律している。

サルだって人口の自己調整をしているらしいが、人間だけが自己調整を忘れてしまっている。二十一世紀の人口急増は行く先が深刻で、二十年後の二一年には総人口が百億人になる計算が出ている。人類がやっている人口調整は、戦争での他国民の殺りくや、異民族を国外追放して難民が大量死するしかない無策では、イナゴやアリ、ネズミを笑えない。

一寸の虫にも五分の魂があり、生物はすこやかに生きて一生をおくれる完全さをもっているから、からだの構造は何の無駄もなくできている。生物の個体は健全な企業体構造をもち、その企業

経営が順調なら規模の拡大や厚生施設の充実もはかれる。生物の個体のある部分が充実拡大して、経営の安泰を誇示しているよい例が鹿の角だろつ。

鹿の角は他を殺りくする武器ではなく、鹿の文化さえ象徴している道具のようだ。動物のからだが生活に必要な大道具に変わる例はいくらもある。キリンの長い首、ウサギの長い耳、ワシのする



どい爪、ライオンの牙などはわかるが、ゾウの牙になると巨大化の必要性が理解しにくい。鹿の角もそうだが、ゾウの牙と鹿の角は根本的にちがうところがある。ゾウの牙は一生かけて巨大化をとげるが、鹿の角は毎年はえかわる。

鹿が高年齢になるほど角は大きく、枝わかれの分岐がたくさんできた角が毎年はえる。五、六歳の一人前の鹿は帝王の王冠のような威厳をもつが、その威厳も秋にはあつさり脱落してしまう。翌春には新しい角がよきよきのび出してきて、その成長速度は速く、四、五月で王冠は完成する。鹿の角の成長のみなざるような生命力に、中国人はビタミンをしのごく強壯作用をみとめている。

中国吉林省通化市の郊外に鹿茸用の鹿飼育場があった。数十頭の鹿がバスケットコートほどの広場でシラカバの葉を食べていた。かれらに近づくと牡鹿が用心ぶかい目でこちらを凝視した。王冠を頭につけた迫力は何だろう。かれの目を見つめながらその力をさぐってみた。

牡鹿の角が闘争用の武器であっても、年中抜き身の刀を頭上にかざして林間をのし歩いただけでは男がすたる。牝鹿はもちろんのこと、人の心までとらえる力をこの角はもつのだから、鹿の仲間全体に強いエネルギーを発信しているのだ。

今の人間にこれだけのエネルギーの発信力があるだろうか。ふといたずらな気持ちがかわいてきた。昔モーツァルトの時代の男には、カツラをかぶり頭髪を肩までたらずファッションがあつた。女におされ気味な男は、鹿の角の王冠をかりて威信を出してみてはどうか。男物最新型「牡鹿の角の冠」がベンチャービジネスに出れば、この写真も御用が増える。

## 鹿茸の価値（2）

九州の南の洋上にある屋久島は多雨にめくまれる生物の楽園で、鹿やサルがきわめて多い。その頭数は島民の人口よりも多いと聞いた。小豆島ほどの小

な屋久島に高さ一九メートルの高山があるから、機上からこの島を見ると海上にヘルメット帽が突き出ているように突出して見える。

この島の山奥で一夜を野宿した朝のことだった。食器をかたづけると、手元に気がとられていると、人の気がない場所なのに、朝霧の中を人影らしいものが近づいてくる。目の前まで迫ってきたのは鹿だ！ とっさのことであわてたが、気をとりなおし、サラダ菜とピーナッツを手土産に差し出す。鹿にサラダを手わたせるほど近づけた、めったにないたのしい出会いだった。

ここの鹿は小柄で奈良公園の鹿より小ぶりの姿だ。鹿の角は冬には頭からはげおちて坊主頭になる。だったら奈良公園の鹿はなぜ角狩りをしてまで無理に切りとるのだろうか。観光都市の公園で放し飼いする大型動物だから、人と鹿とのトラブルは避けられないのが事情らしい。

鹿の角を切りおとすのは、髪や爪とちがって切り口から血が流れる。中国吉林省の鹿飼育場で角切りを見たときのことだった。バツサリ切りおとされた角は、小児の腕の太さほどもある。角が山のように積みあげられていて、受け皿のホウロウバットには深紅の血がたまっていた。

サンゴのように分枝した巨大な鹿の角が、わずか半年でこれだけ成長する。春先からほんの四、五カ月の間にニョキニョキと急成長するのだから、角の組織には血管もよく発達している。だから巨大な角の切り口から出る血液は強壯作用も強かるう。日本の体力増強剤のエースとしてならしているドリンク剤よりずっと魅力になってくる。中国では鹿の角をその血までも貴重な薬にするのがもっともにおもえる。

写真は吉林省の鹿飼育場で鹿の角を乾燥処理して仕上げた鹿茸だ。生きて鹿の角とくらべると肌ざわりや色が大きちがっている。鹿茸の製法は、鹿から切りとった角を切り口からたれおちる血をよくとってから、熱湯の釜につけて滅菌し、温風を流した小部屋で半干しにしたあと、風通しのよい屋内の天井にさげて何十日も干す。すると黒光りした鹿茸に仕上がる。どこかカツオブシの加

工を連想する。カツオブシは味がいのちだが、鹿茸は活力、成長力のエネルギーがいのちだ。そこに着眼した中国人は、鹿の角を硬いものにとらえずに、茸のような柔軟さと急速な成長力をみて鹿茸と名づけた。

生命の活動力の英名バイタリティーの言葉からビタミンの名ができているが、鹿茸こそビタミンのお家元にしてもよい。



鹿茸を薬剤のかたちにする剤型のつくり方を説明しよう。鹿茸の切り口はリンコンのように多孔質だから、この孔に焼酎をしませてやわらくしてスライスにする。これは硬い干物の調理法によく似ている。

香港の鹿茸専門店では、この高貴薬をスライスして調製するのを店頭でショーにして、市民がたのしんでいる。中国薬は種類が千種をこえるが、鹿茸だけを売る専門店があるほど鹿茸の薬の価値はきわめて高い。

広い中国大陸の各地を訪問してきたが、今も印象に残るのは、薬店の看板で「人參」「鹿茸」を薬店の屋号より大きく出していたことだ。人參と鹿茸を売る店は薬店の格の高さを示すほど、人參と鹿茸は市民の信頼をつかんでいる。

日本ではこの鹿茸の価値がまだ十分認知されていないのはなぜだろう。日本人の動物薬に対する価値評価はみんなどれれももつひとつだ。熊の胆のう、牛黄、マムシ、これらの薬剤が、ビタミン剤と大相撲をやってもよい時期ではなからうか。

古都奈良の公園の近くで、鹿茸のスライスを店頭でデモしながら売り出す名物の薬店が出たとしてよう。その店先に人だかりができる情景はただ一夜の夢か。